

(西暦) 2019年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

回復期リハビリテーション病棟入院中のクライアントと作業療法士の治療関係はどのような経験から成り立つのか

～解釈学的現象学の方法を用いて～

学位の種類: 修士 (作業療法学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 18896706

氏名: 嶋田 隆一

(指導教員名: 石井 良和 教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

【はじめに】

作業療法士とクライアントの関係は、作業療法の成功や失敗の重要な決定要素である。しかしながら、治療関係に関して学ぶ機会は少ないことが知られている。また、回復期病棟入院中のクライアントと作業療法士の協業の困難さが報告されており、作業療法士とクライアントとの治療関係構築のプロセスが十分に理解されていないのが現状である。

【目的】

回復期リハビリテーション病棟で作業療法士とクライアントが、治療関係構築の際の経験についてどんな意味づけをしているかについて明らかにすること。

【方法】

解釈学的現象学を用いた質的研究を行った。回復期病棟入院中のクライアントとその担当作業療法士から構成される3組、計6名の研究参加者に参与観察とインタビューを行った。インタビューと参与観察は、入院2週間から退院直前までで計3回ずつ行った。得られたデータから、関係性についての語りを分析対象とし、解釈学的現象学の観点からテーマ分析を行った。

【結果】

テーマ分析の結果から、クライアントは6つ、作業療法士は5つのテーマが明らかになった。

回復期病棟入院中のクライアントは、<セラピストに対する期待と不安>、<身体的接触と情緒的交流>、<作業療法の意外性>、<改善の兆候の実感>、<期待以上の関わり>、<いまの自分を知ってくれている作業療法士>を作業療法士との交流を通して経験し、意味づけていた。

担当作業療法士では、<思いを汲み取ろうという態度>、<希望に応じた介入の調整>、<残存する障害と生活の変化に対する見通し>、<即興的な振る舞い>、<関係が終わることへの配慮>をクライアントとの交流から経験し、クライアントとの治療関係を意味づけていることが示唆された。

【考察】

本研究の結果より、回復期リハビリテーション病棟入院中のクライアントと担当作業療法士が経験している治療関係の成り立ちと意味づけに関して、①入院当初の関わり、②関係構築に向けての作業療法士とクライアントの経験、③関係の帰結に向けての関わりという視点で治療関係を意味づけていることが考えられた。

作業療法士とクライアント双方の認識を理解することで、治療関係構築の際の一助になりえると考えられる。